

ノエマのイデア性

二宮 公太郎

Idealität des Noemas

Kohtaroh NINOMIYA

Abkürzung : Noesis ist der reelle Akt. Aber Noema ist das irreelle und ideelle Korrelat desselben. Meine kleine Mitteilung untersucht den Grund dieses Seinscharakter des Noemas. Einmal dachte Husserl diese Beziehung analog zu der zwischen den einzelnen Dingen und dem abstrakten Begriff. Aber er fand die Differenz der Dimensionen der Fragen. An den beiden kann die einzelne Noesis intendieren das allgemeine Noema. Schließlich kommt es auf den Seinscharakter des Bewußtseins selbst an. Die Idealität des Noemas kommt von der Allgemeinheit des Bewußtseins, welche durch die transzendente Reduktion aufgefaßt wird.

Schlüsselwörter : Noema, Idealität, Transzendente Reduktion

1. 問題

<ノエマ>は、不思議な存在性を示す。 <意味>を形成する<ノエシス>は、<実的>reell に意識に属する。しかし、このノエシスが形成するノエマは、実的な意識作用を離れて、汎通的で「イデア」的な存在性を獲得するのである。

本レポート⁽¹⁾は、このノエマのイデア性に関して、その正体は何なのか？ 何に由来するのか？ 如何にして基礎付け得るのか？ といった問題を、ごく一般的に扱う。「一般的に」と言うのは、この問題を考えるための道筋を付けるための限りで、という意味である。従って、本レポートは厳密な意味での学問的な論証を目指したものではないという事を、初めにおことわりしておかなければならない。

問題を把握し易いように、予備的考察として、<集合>の形成ということを手掛かりに、具体的に考えてみよう。集合のような数学的対象は、物体のように思惟から独立に実在するものではなく、あくまでも思惟によって形成されるものだが、しかし「客観的」な存在を保持し、誰のものにもなるが、誰かにもみ属するのではない。数学的対象のこのような存在性格が<ノエマ>の原型となったと思われるのである。

フッサールの初著作『算術の哲学』第一巻(1891)において、集合は、収集的 *kollektiv* 結合に加えて、それへの「反省」によって成立する、とされている。しかし、この把握によれば、集合は、個人の意識の内にもみ存在することになる。このような存在性格は、

数学的対象の「客観的」な存在性格にそぐわない。この把握が「心理論主義」として問題視される由縁である。

しかし、フッサールが『算術の哲学』第二巻を準備していた**草稿（1901年頃までの記述を含む）**の内では、既に「概念」そのものによる集合の形成が、当然のことのように語られている。「ライオン」という概念がライオンの集合を形成し、「或るもの」一般という概念が“1”の集合を形成する、というふうなのである。

上に呼応して、『論理学研究』**第一巻（1900）**では、心理論主義への自己批判が一般的に語られ、その**第二巻（1901）**第六研究には、＜集合は、反省を待たず、収集する意識作用の対極に成立する＞という旨が語られている。ここでは、集合という数学的対象が、実質的には＜ノエマ＞として把握されているのである。

2. 「抽象」概念との相違

『論理学研究』においては、後に＜ノエマ＞と呼ばれるものが「意味」と呼ばれ、＜ノエシス＞に当たる方の意識作用も「意味」作用と呼ばれていた。本レポートのテーマである問題は、汎通的・アイデア的な＜意味＞と個別的・実的な＜意味作用＞との関係をめぐる問題となる。この関係を、フッサールはこの時点で、＜抽象概念＞と＜個別的存在者＞との関係に対応させる。例えば、種としての赤そのものと、この赤いバラやこの赤いテープとの、関係に対応させるのである。

このような把握においては、「抽象」概念形成の理論をめぐる厄介な議論に巻き込まれることになる。我々は、これを避けることにしよう。＜ノエマ的意味＞という概念を初めて導入した**1908年の講義「意味論と判断論の根本問題について」**の時点では、フッサールは問題の本質に気付いていた。

彼は、意味＜表現＞の場面で、ノエシス的意味作用を、話し手が対象に向う仕方から語り、これと相補的に、ノエマ的意味を、準-对象的な所与性において語る。ノエシス的意味作用が個別的な赤いバラや赤いテープを志向するとき、ノエマ的意味も、それら各々の個別的な対象に関するそれとして成立する。他方、種としての赤そのものをも、ノエシス的意味作用は、そのつど、ノエマ的意味として志向することができる。そのつどのノエシスに対するアイデア的ノエマの関係は、個別的な対象に対する抽象概念の関係とは、次元が異なるのである。

1920年の講義（これは『経験と判断』に載録されている）においては、もっとはっきりと、意味の「非-実的」な性格が語られる。フッサールは、＜判断の意味を把握するのに、判断作用を比較しつつ一般化する「抽象」を遂行する必要はない＞という旨を語る所以である。

3. 解決

我々は結局、主観そのもの・＜意識＞そのものへ戻らなければならない。

各自の意識そのものが、普遍的なレベルを有っている。ノエマのアイデア性はこれに由

来する。意識を初めからこの存在性において把握するのが「還元」——正確に言えば「超越論的」還元——である。『イデー』第一巻(1913)の時点において、フッサールはこの方法を獲得していた。1920年の講義で彼が意味の非・実性を断言し得るのは、これを前提しているのである。

還元に関しては、用語の正確さにおいて、『ブリタニカ』草稿(1927)が優れている。我々はこれに拠って考えよう。

現象学的還元は、世界を意識への現われとして把握する。このとき、意識は、世界を「超出」とすると同時に、現象学が研究すべき広大な領野として開かれてくる。

ところが、意識が単に個別的なレベルにおいて把握されれば、それは再び世界の内へ置き戻されることになる。これに対して、世界からの超出を意識そのものに関して徹底するのが、**超越論的還元**である。このとき意識は、単なる個別的な意識としてではなく、普遍的なレベルにおける意識——超越論的意識——として把握される。こうして、志向する意識の存在性格は高次化される。

しかも、「超越論意識は各人に内在する」とフッサールは言う。意識は、各人の個別的意識ながら、それが同時に形相的なレベルにおいても把握され得る。因みに、もう一つ別の還元である形相的還元は、現象学の研究態度に関して、事実から形相へ———事実的諸学から形式的諸学へ、或いは心理的諸事実から意識の形式的諸構造へ———と視方向を変更するものである。これに対して超越論的還元は、言わば、意識の存在性格そのものを形相化する手続きなのである。

個別的・実的な意味形成作用であるノエシスが、普遍的な相において、同一的・イデア的な意味としてのノエマを形成することができるのは、このゆえである。ノエマのイデア性は、個別的でありながら普遍的でもあるという、現象学的に把握された意識そのものの存在性格に、由来するのである。

[次ページ以降に、レポートの際に配布したレジュメを付する。]

注

1. 本稿は、2003年10月16日に室蘭認知科学研究会で口頭発表したものの抄録である。

執筆者紹介

所属：室蘭工業大学 共通講座

研究分野：哲学（フッサール数理哲学・現象学）

Email：ninom@mmm.muroran-it.ac.jp

ノエマのアイデア性

認知科学研究会 2003.10.16. 二宮

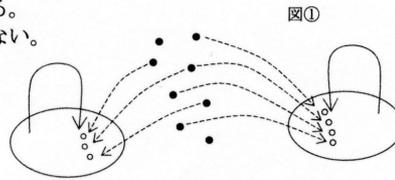
I. 問題

a. 『算術の哲学』I, 1891

集合の形成
収集的 *kollektiv* 結合と、それへの「反省」による。

↓
個人の意識の内にもみ存在することになる。
数学的対象の客観的な存在性格にそぐわない。

↓
心理主義として批判される。



b. 《数理哲学草稿》, ~1901

概念による形成
「ライオン」 → ライオンの集合
「或るもの」一般 → “1”の集合
数学的対象の存在性格が<ノエマ>の原型となったと思われる。
「客観的」な存在を保持し、誰のものにもなるが、誰かにもみ属するのではない。

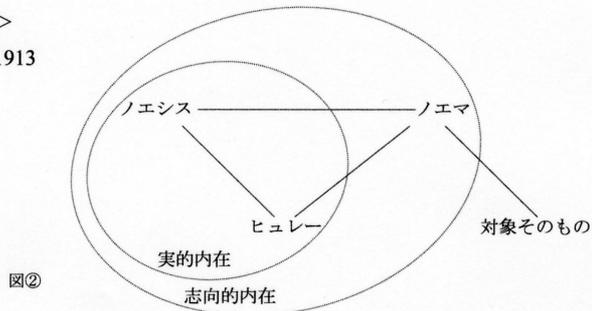
c. 『論理学研究』I, 1900 / 『論理学研究』II, 1901

反省を待たず
「収集する意識作用の対極に成立する。」

↓
集合（数学的対象）が、実質的には<ノエマ>として把握されている。

d. <ノエシス>と<ノエマ>

『イデー』I, 1913



ノエシスとヒュレーは、実的 *reell* に——その都度、個別的に——意識に内在する。
ノエマは、意識に対して「非-実的」に存在する。

ノエマは、実的に意識に属するのではなく、
志向的に——志向される限りで、志向の内——、意識に対して存在する。

ノエマの<イデア>的な存在性格。

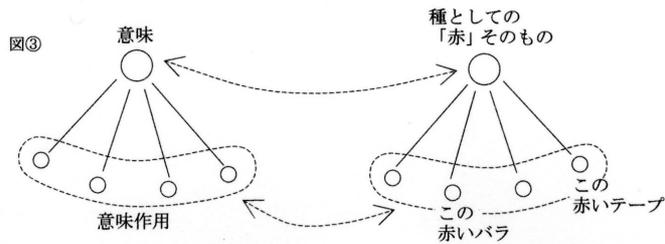
誰にとっても、その都度の個別的なノエシスに対して、同一性を保つ。

||
この報告のテーマ
正体は何なのか？
何に由来するのか？
如何にして基礎付け得るのか？

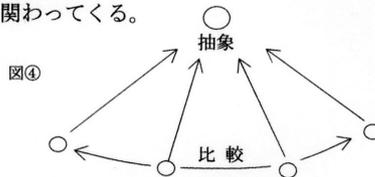
II. 「抽象」概念との相違

a. 『論理学研究』II, 1901

イデア的な<意味>と実的な<意味作用>との関係を、
<抽象概念>と<個別的な存在者>との関係に対応させる。

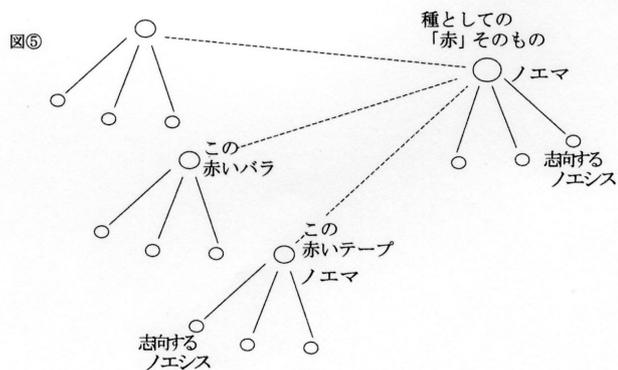


↓
「抽象」をめぐる複雑な理論に関わってくる。



b. 1908年の講義

<ノエマの意味>概念を導入——意味<表現>の場面で。
ノエシスの意味作用を、話し手が対象に向う仕方から語る。
ノエマの意味を、準-対象的所与性において語る。 (→『イデーン』I)
問題の本質に気付いた。
その都度の<ノエシス>に対するイデア的<ノエマ>の関係は、
個別的な<対象>に対する<抽象概念>の関係とは、次元が異なる。



c. 1920年の講義

意味の「非-実(在)性」を語る。
「判断の意味を把握するのに、判断作用を比較しつつ一般化する「抽象」を遂行する必要はない。」

III. 解決

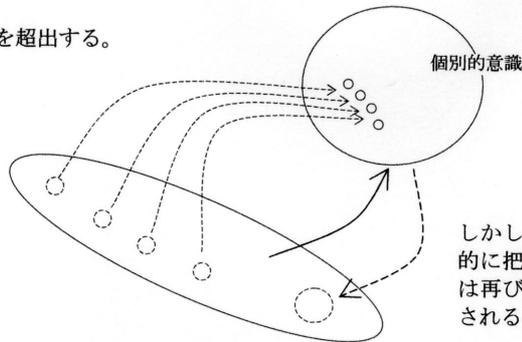
ノエマのイデア性(非-実性)は、
何処から来るか?
如何にして基礎付けられ得るか?

↓
<還元>に由来する
意識の普遍的なレベルが在る。
<還元>がそれを把握する。

『イデー』I, 1913
Vgl. 『ブリタニカ』草稿, 1927

a. 現象学的還元

世界を意識への現われとして把握する。
意識：現象学の研究すべき領野
同時に、
意識は世界を超出する。

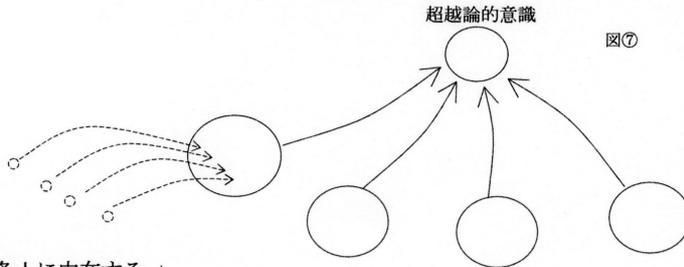


図⑥

しかし、意識が単に個別
的に把握されれば、それ
は再び世界の内へ置き戻
される。

b. 超越論的還元

志向する<意識>の存在性格を高次化する。
個別的意識ながら、それが形相的なレベルにおいて把握される。



図⑦

しかも、
「超越論意識は各人に内在する。」

↓
個別的・実的な意味形成作用である<ノエシス>が、
対象の普遍的な相において、同一的・イデア的な意味としての<ノエマ>を形成することができる。